

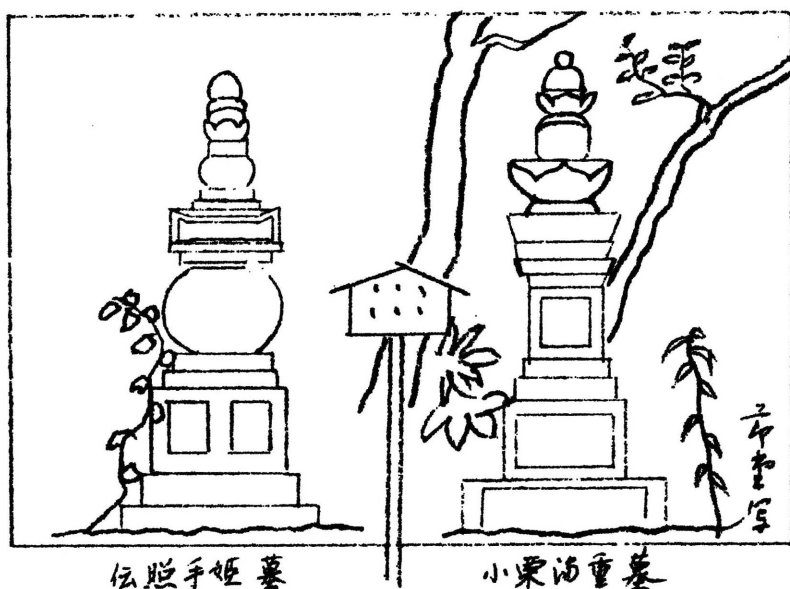
はまゆうと桜貝と

海光るわが故里



昭和五十九年七月号
通巻第二十一号

鵠沼を語る会



さくら貝訂正と防風に追加

富士山

昨日、伊藤節堂さんから、さくら貝を頂いた。こんな小さなものとは思わなかった。これでは若い頃近眼の私の眼に、また今、白内障の眼では、海辺を探しても見つからないと考えた。

皆さんの話では、鵜沼の浜から片瀬寄りの方が、辻堂寄りより、さくら貝が多く見つかるという。

ほうふうに追加

昨日の話では、ほうふうは今でも沢山に見られるというので、牧野先生が「今ではほうふうは国内では絶滅した」といわれるのとは大変に違うと考えたので、帰宅して再調査したところ、私や皆さんのいう「ほうふう」とは「はまぼうふう」というのが本名で、日本国中広く産生し、産生最中には、八百屋の店先にまで並べられてあるので、「八百屋防風」の別名があると出ており、この件すっかり判明した次第であり、牧野先生に改めて敬意を表する。

(昭和五十九五月九日記)

幻のツキミソウ

伊藤 節 堂

私がここに「幻のツキミソウ」と呼ぶのは、牧野植物図鑑にいう「ツキミソウ（一名ツキミグサ）」で、花は白色、四弁、夕方開き、朝萎んで紅変するのをいうのである。

同図鑑には「嘉永年代にマツヨイグサ等と同時に伝来せしと雖も性弱きために、野生状態とならずして了り、現時は世間殆んど之を見ざるに至れり、世俗往々オオマツヨイグサを以てツキミソウと呼ぶは非なり」とある。

昭和五十四年八月の毎日新聞文芸欄に俳人青柳志解樹氏（山暦俳句会主宰）の幻のツキミソウに関する随筆がのった。それがきっかけで、翌五十五年二月九日、同氏から幻のツキミソウの種子を頂くことになった。

「立春を過ぎ、春の息吹きが少しずつ感じら

れます。かねてお約束の月見草のタネ本日お届けします。栽培は簡単で失敗することはまずありません。参考までにパンフレットを作りましたので、同封しました。」

パンフレットには「待望の月見草の種子を送付しますから栽培して下さい。播種は四月中旬：：定植は少量なら鉢植えが無難：：：開花は八月：：越冬は鉢のまま土中に埋めておく：：」など、こまかな説明があつた。

私からは「月見草の種子有難く頂きました。世に幻しの花といわれる月見草、私の生のある限りいつくしみ育て、決して絶やすことのないようにいたしたいと思います」と、折り返し札状を差し上げた。

播種は四月中旬というのを待ちかねて、四月四日に播いた。発芽は四月十五日、そしてついに、七月十九日午後六時二十六分、幻の第一花か、息をとめて見つめる私と妻の目の前で、ふっという幽かな音をたてて開いた。

（昭和59・5・26記）

誓女唄「小栗判官照手姫」

伊藤節堂

(はじめに)

いま、藤沢市では市内全域にわたって地名調査が行われている。

それは「地名はわれわれの祖先が大地に名づけた重要な、歴史的な文化遺産である」という考え方に立つものであって、この貴重な地名を収集保存して後世に遺すとともに、行政の面にこれを活かそうとするものである。

方法としては、藤沢市から日本地名研究所（谷川健一所長）に調査を委託し、市内各地域からボランティアとして参加した調査員によって行なわれる。

所長の谷川健一氏はわが国トップクラスの民俗学者であり、地名研究に関しては第一人者である。

氏は昭和五十六年四月第一回全国地名研究者大会を川崎で開き、五十七年には新潟で全国シンポジウムを、五十八年には第二回全国大会を、そして今年五十九年には第三回全国大会を三たび川崎で開催するというエネルギーッシユな活動振りと、不撓不屈の信念の前に只々敬服するばかりである。

一、青墓の女

私は藤沢市の地名調査に参加したことから、しばしば谷川健一氏の博識と温容に接するのであるが、最近、氏の著作集の中から「青墓おうはかの女」という短編を読んだ。

それは「小栗判官照手姫」の物語の中で、美濃国青墓しゆくの宿すいじで水仕女として働いていた照手姫ならびに当時の青墓の女たちについて論及したものであった。

二、阿賀北の曹女と誓女明巢

谷川健一氏の「青墓の女」を読んでいるう

ちに私は、頭のどこかにこびりついて離れなかった佐久間惇一氏の「阿賀北の瞽女と瞽女唄集」を思い出した。

佐久間氏は新発田市文化財調査審議会委員長であるが、この瞽女唄集には、新潟県下越地方の瞽女小林ハル女の語る祭文松坂「小栗判官照手姫」が収録されていて、物語りの舞台がちやうど「青墓の宿」であったからである。

「祭文松坂」というのは、瞽女が伝承する語り物の一つで、「説経祭文」の流れを汲みながら口説化したものといわれている。おおむね七五調の長い物語りを、瞽女独特の節廻しで語りつづけるものである。

語りの内容が長いので、これを四段または数段にわけて語り、一段を語るにはおよそ三十分かかるという。

このように、数段に区切ることから、瞽女はこれを「段物」と読んでいる。

三、祭文松坂「小栗判官照手姫」

(あらすじ)

一の段

美濃国青墓の宿、万屋長右エ門方に、常陸小萩と名乗り、水仕頭として奉公している照手姫は、今宵泊りの殿様から名指しで、お酌に出ることになった。鏡台の前に座り、髪結い、化粧、着物、帯と、やがて支度ができあがる

二の段

照手は四十二人の水仕女の頭でも、ここでは女郎の下である。八十二人の先輩女郎達にあいさつをしたのち、長柄の銚子を持って、ご免ご免と奥の間へ進む。そのありさまを例えるなら、千羽の鳥の中へ孔雀が一羽舞い下りたようである。

三の段

照手は今宵泊りの殿様が小栗判官とは知由もない。もしや相模の兄上では、などと思いながら、唐紙のすき間からうかがうと、な

んと！相模で二世を交した夫小栗に生き写しである。照手はびつくりして畳に倒れ伏す。一方、主人長右エ門は心配で様子を見にくる。するとこのありさま。照手をはげまし、先に立って唐紙をあける。

四の段

照手―今宵お泊りの札をのべる。

小栗―金の盃につがせてから、常陸小萩よ、

そなたは如何なる子細があつて常陸を名乗るのか、また何人なんびとの娘じやと訊ねる。

照手―さんげ話をききたいなら他の者とかわります。と立とうとする。

小栗―おしとどめ、見せるものがあるといつて、ふくさの中から木札を取り出し、照手に与える。

照手―木札を見てびつくり、いつか餓鬼がきあみ阿弥の乗った車を大津の玉屋まで引いたが、別れぎわに自分の書き与えた木札がどうしてここに、と不思議がる。

小栗―いつぞやはそなたに、この家の前から

大津まで送ってもらったが、そのあと熊野の湯に入り本服して帰った、と物語る。照手―お殿様は冥土から帰られたか、わが夫小栗判官も冥土へ行つたが、冥土の便りをきかせてと泣く。

小栗―わしが夫の小栗と名乗りたいのをがまんして、えんま大王から藤沢の遊行上人宛の安堵状（注・ここではこの者を娑婆へ戻し、身柄は上人に預けるという確認書）を取り出して照手に見せる。

照手―ここではじめて小栗が生き返ったいっさいの謎がとけ、手を取りあつて嬉し涙にくれる。

四、美濃国青墓の宿

さて、この物語りの舞台となっているのは、美濃国不破郡青墓村おうはかで、当時鎌倉街道と呼ばれた東山道の宿場「青墓の宿」として賑わったところである。

明治十四年の青墓村は戸数一五八戸、人口

六七六人であった。その後合併をくり返し、昭和四十二年に大垣市に合併、現在大垣市青墓町である。

五、常陸國小栗城

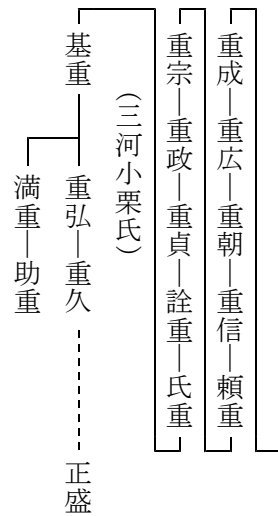
つぎに、この物語りの主人公小栗判官の居城があった小栗は、茨城県真壁郡協和町小栗である。

明治二十二年の市町村制で小栗、逢田両村が合併して小栗村が成立、昭和二十九年の町村合併で協和村となり、現在は協和町大字小栗である。地図の上では、東北本線小山駅から分かれる水戸線新治（にいばり）駅の北方にあたる。

六、小栗氏の系図

小栗氏の出自は桓武平氏大掾氏の子孫であって、「常陸大掾系図」及び「小栗系図」ではつぎのとおりである。

（常陸大掾氏） （小栗氏）
為幹―重幹（繁幹）―重家―重能―



このように代々常陸の豪族として真壁郡小栗城を本拠としたが、小栗五郎重家（一に重義）から小栗氏を名乗った。

小栗氏の所領は三河にもあつて、基重の長子重弘は三河小栗氏の祖となったが、次男の孫次郎満重は常陸の本領を譲り受け、小栗城に住した。

七、小栗満重の乱

応永二十三年（1416）世にいう上杉禅秀の乱が起こり満重は禅秀についた。ところが禅秀が敗れたので満重は足利持氏に降った。そのため持氏に多くの領地を削られ、満重はこれ

を深く恨みに思う。

応永二十五年（¹⁴¹⁸）小栗満重は鎌倉にあつて、一色左馬権頭と共に足利持氏に謀叛を謀った。その計画が発覚し、常陸に逃げて小栗城に拠った。

その後度々持氏と争うのだが、応永三十年（¹⁴²³）七月八日持氏自身、常陸に出陣して小栗城を攻めた。翌八月二日遂に小栗城は落城した。

満重は子助重と共に三河に逃れ、一族貞重を頼った。また、一説には、満重は小栗城に自害し、子助重は三河に逃れたともいう。

永享十一年（¹⁴³⁹）足利持氏が滅亡した後、嘉吉元年（¹⁴⁴¹）小栗助重は室町幕府に願い出て常陸に帰り、佐竹氏を敗って旧領を回復した。しかし、康正元年（¹⁴⁵⁵）足利成氏に攻められて没落した。

八、小栗伝説

これまで述べた小栗氏系図、小栗満重の乱、

そして、小栗助重の小栗城奔回と落城までは、すべて歴史的事実によるものであるが、これから述べる「小栗判官照手姫」はすべて伝説としての物語りなのである。

小栗伝説には、その原型ともいうべき「鎌倉大草紙」をはじめ、長生院ちようしやういんに伝わる小栗略縁起、宮内庁蔵の御物絵巻「をくり」、説教「おぐり判官」など多種多様であるが、ここでは、前述の瞽女唄と内容が照応するようには御物絵巻「をくり」のあらすじを紹介することにしよう。

九、御物絵巻「をくり」（あらすじ）

（小栗殿） 二条大納言兼家の一人息子有若は、元服して常陸小栗殿と称した。十八才のとき大蛇の化身と契ったため、常陸の領地に流される。

（結婚） 小栗は武蔵・相模の郡代横山殿の娘照手姫を見初めて結婚する。

(毒殺) 親の許しを得ない結婚に怒った横山

殿は、小栗と家来十人を宴に招いて毒殺する。

(えんま) 閻魔大王は家来十人の願いを聞き、

小栗の首に大王自筆の札を下げ、藤沢の遊行上人のもとに返す。

(餓鬼阿弥) 小栗は目も見えず、口もきけぬ餓

鬼阿弥の姿で塚を破ってよみがえる。

(土車) 上人は小栗を土車にのせ僧二人をつけて東海道

を熊野へと送り返す。

(照手姫) 一方、照手は殺されるところを船で流され、

人買いに売られ、美濃国青墓で遊女宿の水仕女となる。

(大津へ) 照手は宿の前の餓鬼阿弥を、夫の

小栗とは知らず、大津まで引いてゆく。

(熊野へ) 小栗は熊野の湯の峯で湯治をして人間によみがえり、再び、照手と結ばれる。

一〇、小栗塚

相模の横山殿に謀殺された小栗と十人の殿

原が閻魔大王の前に引き出される。大王は、小栗は大悪人だが、殿原十人は何れも善人だから娑婆へ帰れという。殿原は、われわれが娑婆へ帰っても益はないから、判官殿を娑婆へ返してほしいと願い出る。

大王は藤沢の遊行上人へ手紙をかく。

この夜、遊行上人は夢を見る。大王からの手紙が届く。手紙には「小栗を生きかえらせる。早く熊野の湯に入れば全快する」と、かかっている。上人は弟子を上野ヶ原^{うわのがはら}にやると餓鬼の姿になった小栗が塚を破って娑婆に戻る。

私は西俣野字小栗塚にこの塚を訪ねた。史跡保存会の案内板を頼りに坂を上ると、県道切通しの道路わきに「小栗塚」の標柱があった。切通しの上は一面の畑で、近くの農家でたずねると「ここは、ハラ^{●●}というところだ」とお婆さんが答えた。

小栗が餓鬼になって黄泉^{よみじ}返りしたと伝える塚は、いまは、県道菖蒲沢戸塚線によって、

真つ二つに切り通されてしまっていた。

一一、長生院

長生院ちやうしやういんは藤沢市西富の遊行寺山内にある。秋の彼岸に遊行寺本堂南側のゆるい坂道をのぼると、燃え立つような曼珠沙華が道の両側を埋める。

長生院には「小栗略縁起」が伝わっていて、それには「小栗満重は応永三十三年（1426）三月十六日に死去、その子助重が家を継ぎ、鎌倉に参り亡父満重と十勇士の墓を八徳池のほとりに建てた」とあり、現在、長生院の奥の池のほとりには、小栗満重の墓を中心に、家来の墓が五基づつ左右に並ぶ。

一方、照手姫は満重の死後出家して長生比ちやうしやうひ

丘く尼にといい、閻魔堂（現在の長生院小栗堂）の傍に住んだが、永享十二年（1440）十月十四日に死去した。

法名は長生院寿仏房で、小栗堂がその遺跡として伝えられる。そして照手の墓は小栗の少し左、白萩の花が咲きこぼれる下にあったが、最近、萩をしたら梅に植えかえてしまった。青墓の遊女宿で「小萩」と名乗った伝説からすれば、白萩の咲きこぼれる風情の方が、むしろふさわしかったと思う。

一二、警女淵の碑

ここは藤沢市西俣野九八六番地先で、ここに警女淵けいづの碑がある。この碑から東側一〇〇mのところを境川が流れていて、対岸は横浜

市戸塚区東俣野町である。

碑は高さ二m、巾一m、台座の高さ九〇cm

の大きなものである。中央に「瞽女淵之碑」、左に「高座郡長従六位勲五等若林良之書」とある。

裏には建碑の由来と有志全員の氏名が刻まれるが、碑文を要約すると

『むかしからここには淵があつた。延宝年間

(1673〜1680)に一人の瞽女が溺死したので、瞽

女淵というようになった。その後も何人かが落ちて死んだ。村人は淵を埋め、堤防を築い

たが、一度洪水にあうと必らず決壊して淵となり、田に氾濫した。弘化二年(1845)一人の

浪人が、「水害を除くために人柱となる」と、遺書を残して入水した。村人は霊を祭り、土

手番さまと崇めた。

明治四十二年(1909)に藤沢町、六会村、俣

野村連合の耕地整理が行なわれたので、昔の淵の姿はなくなった。ここに碑石を建てて殉難者の冥福を祈るとともに 淵の記念とする。

大正元年(1912)十二月十四日建之

一三、はずれ瞽女

淵に落ちた瞽女は、村人によってねんごろに葬られたが、伝えられるその墓は、西俣野の閻魔堂跡といわれる北村家の墓地内にある。

また、その瞽女は子どもがあつて、いっしょに埋葬されたと伝えられている。子連れの瞽女ならば当然はずれ瞽女である。子連れでなくとも、一人歩きの瞽女は「はずれ」とみ

なされた。

それにしても、もとはどこの瞽女であつたのか。私には越後の瞽女のように思えてならないのである。なぜなら、佐久間惇一氏によれば「越後瞽女は、関東一円から甲斐信濃へ足を伸ばしている」とあるからである。

瞽女の掟では、仲間に入っているあいだは、結婚できないものとされ、結婚すると当然仲間をはずされた。

「はずれ」になると、巡業していて仲間に出れば、どこでも三味線と荷物を取り上げられた。だからはずれ瞽女はもとの仲間に逢わないように、仲間の立ち回らないところをひそかに歩いたという。

これらのことを考え合わせると、越後の

ずれ瞽女が、相模の村々を廻るのは決して不思議なことではない。瞽女は繁華な町なかよりも、むしろ辺びな農村、山村、漁村などを廻るのが常であつた。

ことに、弁財天は瞽女の守り本尊である。江の島の弁財天を詣りたい一心で、ひたすら南下をつづけていたことであろう。

一四、瞽女の墓

慶長六年（1601）伝馬制度が設けられ、東海道が整備されるにしたがつて、道案内書や名所絵図がつぎつぎにつくられ、藤沢宿の項には「小栗判官照手姫」が必らずといつてよいほど記入された。

境川をはさんで東俣野にも、西俣野にも、

小栗伝説の地名はいくつもある。瞽女はそれらゆかりの村々を廻りながら「小栗判官照手姫」の段物を語ったことであろう。

「はなれ瞽女おりん」(水上勉)が、地藏堂や阿弥陀堂を泊り歩いたように、この瞽女もまた、西俣野の閻魔堂に寝泊りしながら廻っていたのではなからうか。

閻魔堂跡に瞽女の墓があるのはそのためかも知れない。

私はえんま堂跡に立って、小栗墓塔のかたわらにある「法挙容西」とかろうじて読める小さな墓石に、仲間からはずされた瞽女の郷愁をみる思いがした。

—— 完 ——

(昭和五九・五・九記)

(文献)

「谷川健一著作集」三一書房

佐久間惇一「阿賀北瞽女と瞽女唄集」

三谷栄一編「口承文芸」有精堂

太田亮「姓氏家系大辞典」角川書店

橘俊道「遊行寺」名著出版

「藤沢市史」第四卷・第五卷

「日本図誌大系」朝倉書店

「日本歴史地名大系」平凡社

「小栗伝説」の文献比較

伊藤節堂

文獻	1	2	3	4	5
鎌倉大草紙	小栗満重の子 小次郎助重	長生院 「小栗略縁起」	御物絵巻 「おぐり」	説経 「おぐり判官」	祭文松坂 「小栗判官照手姫」
場所	相州権現堂 盗賊の宿	藤沢の 横山大膳の館	武蔵・相模の郡代 横山殿の館	相模国の住人 横山殿の家	相模
相手役	盗賊宿の 遊女てる姫	妓女照手姫 父は北面の武士	横山の娘照手姫	横山の娘照手姫	照手姫 相模に父母・兄あり
事件	盗賊は小栗一行を 毒殺して財宝を 奪おうとする	小栗と夫婦約束 横山は小栗主従を 酒宴に招き毒殺する	小栗と結婚 横山は小栗主従 を毒殺する	小栗と契る 横山は小栗主従を 毒殺する	小栗と二世を交す 小栗は毒殺される
遊行 上人	小栗は馬で逃げ遊 行上人のもとにゆく	太空中人が夢を 見る	小栗を上野ヶ原 へ捨てて 小栗だけ土葬に する	小栗土葬にされる	小栗冥土へ

照手姫	青墓	熊野	エピローグ	
上人時衆二人を付けて小栗を三河へ送る	一方、照手は川に投げられ、漁師に助けられる	照手、青墓で遊女となる	永亨のころ小栗、三河からきて盗賊を討ち、照手に財宝を与える	えんま大王は上人へ手紙が届く 小栗ソ生する 太空中人は小栗を車にのせて熊野へ
一方、照手は舟で流され、人買に売られる	照手、青墓で水仕女となる	小栗、本宮の湯に入り全快する 小栗城へ戻る	照手姫と結ばれる	えんま大王は小栗を遊行上人のもとに返す 小栗餓鬼の姿で蘇生 上人、小栗を土車にのせて東海道へ
一方、照手は海に沈められるところを助けられ人買に売られる	照手、青墓で水仕女となり、常陸小萩という	照手、ガキ姿の小栗の車を大津まで引く 小栗、熊野湯の峯で湯治し、全快する	照手と夫婦となり、常陸の領地へ	えんま大王は小栗を藤沢上人へ送る 上人、小栗を車にのせて青墓へ
照手、青墓万屋で水仕女常陸小萩を名ものる	照手、小栗とは知らずガキ阿弥の車を引く	小栗、熊野の湯で全快する	照手と結ばれる	えんま大王は安堵状を遊行上人へ

「 鵠 沼 」 昭和 5 9 年 7 月 号
通 卷 第 2 1 号

昭和 5 9 年 7 月 1 0 日 発行
編 集 鵠 沼 を 語 る 会

藤沢市鵠沼海岸 2 - 1 0 - 3 4
鵠 沼 公 民 館 内
電話 3 3 - 2 0 0 1 、 2 0 0 2